

フランス語の前置形容詞における例外

——grand-mère等にみられる複合語の性数一致の例外について

二 瓶 恵

1. はじめに

前稿ではフランス語を学ぶ初学者にどのように形容詞を教えていくかについて、品質形容詞 (adjectif qualificatif) の中でも最も一般的に使われる付加形容詞 (épithète) に焦点を絞り用例を用いながら纏めている。形容詞は名詞を修飾するものとして、どのテキストでもかなり早い段階でフランス語学習者の習得事項として出てくるが、前置/後置、性数の変則的綴り、男性第二形などさまざまな例外が出てくるため躓く原因となっている。簡単なようで、学習者が既に持っている知識とは異なる部分も多いため（日本における学習者の場合、第二言語として既にある程度習得している英語、または母国語の日本語にはないルールがあるため）、初学者が難しいと感じる箇所である。丁寧に教えるべき場所ではあるが、すべての例外に触れれば逆に学習者を混乱させるため、レベルに応じて説明を加えるべき箇所である。本稿では、それらの例外の中のgrand/petitに今回は焦点をあてる。学習者のなぜにできるだけ寄り添えるよう、その言語歴史の変遷について探っていきたい。

2. フランス語の変遷

フランス語は、その歴史を遡るとラテン語が祖語とされる。そこから、書き言葉であった古典ラテン語 (latin classique) と話し言葉であった俗ラテン語 (latin vulgaire) に分かれ、やがて俗ラテン語が現在のヨーロッパ各言語の基礎となるロマンス語 (langues romanes) へと変化していく。これが紀元100年～500年頃のことである。その後、ローマ帝国の崩壊とフランク王国の台頭により、ゲルマン系の古フランク語 (vieux-francique) が使われるようになり、やがてラテン語から完全に独立した古フランス語 (ancien français) が生まれる。フランス語で書かれたもっとも古い文献として挙げられる「ストラスブールの宣誓」が書かれたのがこの時代である (842年)。14世紀以降になると、いわゆる国の言語として認識されはじめ、さらに言語整備が進んでいく。これが中期フランス語 (français moyen) と呼ばれるものである。この時代に、フランス語の綴り字と発音の見直しが為され、大規模な統制がされる。例えば発音しない子音時の脱落などがその例である。その後、いわゆる現在のフランス語の基礎となる近代フランス語 (français moderne) が誕生するのであるが、この背景にはいくつかの要因が挙げられる。まず、国家機関としてアカデミー・フランセーズが創設されたこと。その目的はフランス語の純化、整備であり、時の国王ルイ13世のもとで宰相を務めていたリシュリューによって1635年につくられた。この機関は、現在もフランス語を守り統一する役目を果たしている。そして、

グーテンベルクによる印刷術の発明も挙げられる。これにより、フランス語の綴りの統一が一気に進むこととなる。それまでは、手書き^{マニユスクリ}で書物などが写されていたので例えばu/vは区別がなされていなかった。もともと古ラテン語において、アルファベ表記は現在のフランス語や英語で用いられている26文字ではなく、j / u / wがない23文字であった。その名残として、例えば、vileはかつて都市（現代フランス語のville）と油（現代フランス語のhuile）の両方に使われていた為、その区別を図るために発音しないhがこの時代に加えられている⁽¹⁾。また、19世紀に入るとフランス語の統制が更に進むこととなる。フランスにおける教育改革と大きな関りを持ち、初代公共教育大臣を務めたジュール・フェリーにより「公立学校制度」が制定される。これにより教育は誰もが受けられるものとなり、同時に「読み書き」が必修のものとなったのだ。フランス語を国の言語として統一する必要がある、綴り字や文法事項の見直しなどが為された。

今回は、これらの幾度にわたる見直しを経ても尚、残った例外の1つについてみていきたい。

3. 性数一致の法則

まず、付加形容詞に一般的な例を挙げよう。付加形容詞は名詞を補足するものとして、文法上強い結び付きを持つ。修飾する名詞の性数に一致するのもそのためである。それは、前置形容詞においても後置形容詞においても同様に当てはまる。一般的に、フランス語の形容詞は名詞の後ろに置かれるのだが、それはまず大事な情報を与え（名詞の役目）、それを補足的に説明するものとして形容詞が置かれると考えられている（＝後置形容詞）。数は限られているがその逆の例で名詞の前に置かれる形容詞も存在する（＝前置形容詞）。日常的によく使われる重要な形容詞群である。これらの形容詞は、主観的な感情や判断を示すもので（大きい/小さい/美しい/新しい/古いなど）、より個人的な情報のため（すべての人に共通するものではないため）区別化するために名詞の前に置かれると考えられている。いずれの場合にも、名詞の性と数に形容詞が一致するという点では前置形容詞も後置形容詞も同じである。

後置形容詞の例

- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 冊の興味深い本（本＝男性名詞） | un livre <i>intéressant</i> |
| 1 つの興味深いお話（お話＝女性名詞） | une histoire <i>intéressante</i> |

前置形容詞の例

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1 つの大きな建物（建物＝男性名詞） | un <i>grand</i> bâtiment |
| 1 軒の大きな家（家＝女性名詞） | une <i>grande</i> maison |

4. 形容詞の性数一致の例外

しかしながら、ほんの一部の形容詞であるが名詞との性数の一致を起こさないという例外がある。それらの例は、現代フランス語では2つの語から形成される複合語（この場合、

前置形容詞＋名詞) のみにみられることが分かっている。その最も身近な例が、かなり早い段階で基礎単語として出てくるgrand-mère (祖母) であろう。mère (母親) という名詞は女性名詞であるから、フランス語初学者は当然のことながらそれまで習ったルールに則ってgrande-mèreと綴りたくなる。しかし、アカデミー・フランセーズも認めているように、近代フランス語において祖母はgrand-mèreと綴る。これは一体なぜか。

そもそも現代のフランス語のように基本形となる男性単数形に-eを足すことによって女性形をつくるという規則は、16世紀以降に普及したものとされている⁽²⁾。古フランス語においては、殆どの形容詞において男性/女性の区別がなく、男女同形を取るものが多かった。grand-mèreのgrand-の例はこの古来の用法が残った希少なケースとされている。ここは、初学者には例外であることを伝える用例であろう。

grand-の同様の例として⁽³⁾

grand-chose	大したこと、もの
grand-croix	グランクロワ章、レジオンドヌールなどの各種勲章の最高位
grand-peur	非常な恐怖
grand-pitié	深い憐み
grand-rue	地方の小都市や村落の大通り、本通り
grand-tante	大おば (祖父または祖母の姉妹)

これらのすべての例において、形容される名詞は女性名詞であるにも関わらず、それを修飾する形容詞は男性形が用いられている。フランス言語歴史辞書によれば、「grandはラテン語のgrandisに由来し、“年齢が進んだ” という意味で使われていた。そこから派生して、“規模やサイズが大きい” という意味に幅を広げていった。古フランス語において、grandという形容詞は1つの形しか存在せず、男女同形で使用されていた。それが、近代フランス語の一部の複合語に残っていると思われる。アカデミーフランセーズもこの形を1932年に正式な用法として認めている」と記されている⁽⁴⁾。

しかし、grand (大きな) と対になるpetit (小さな) という形容詞にはこの現象は見られない。

petite-fille	孫娘
petite-nièce	甥、姪の娘
petites-maisons	旧体制下の精神病院

上記の例に見られるように、形容詞petit-の付く複合語の場合は、同じように女性名詞に付く例にもかかわらず形容詞は性数の一致を起し女性形となっている。grandの対義語になるpetitであるが、こちらは同様にフランス言語歴史辞書によれば、「petitは俗ラテン語のpittuttus (幼児語で “小ささ”) またはイタリア語やスペイン語と言った他のロマンス語が示すように、ラテン語のparvus (フランス語のpetit) やpaucus (フランス語のpeu) を意味する。petitを使った最も古い複合語はpetit-lait (12世紀) で、血縁関係を示

す語として *petite-fille* も記載されている (13世紀)。つまり、形容詞 *petit* に関しては男女同形ではなく古来から男性形と女性形が存在していたとみられる。初学者にはこのあたりは混乱させる原因であるので、*grand-mère* のみの説明で十分と思われる。

5. 性数の一致を起こさない前置形容詞の他の例

他にも名詞の性数の一致がみられない特殊な形容詞が存在する。*demi* と *nu* である。

<i>demi-atténuation</i>	放射能の半減
<i>demi-botte</i>	ハーフブーツ
<i>demi-bouteille</i>	ワイン、ミネラルウォーターなどの小瓶、ハーフボトル
<i>demi-heure</i>	半時間, 30分
<i>demi-journée</i>	半日, 半日仕事
<i>demi-finale</i>	準決勝

いずれも名詞は女性名詞であるのに対し、形容詞は男性形が使われている。すべての例において、形容詞の *demi* は名詞の前に置かれた複合語である。*demi-heure* は12世紀、*demi-journée* は14世紀に既にみられた例である⁽⁵⁾。名詞の後ろに置かれた場合は、*une heure et demie* の例にみられるように性数の一致が起こる。

<i>nu-pieds</i>	紐で脚に結び付ける薄底の軽いサンダル
<i>nu-tête</i>	むきだしの頭, 帽子無しで

これらの例も、同様である。形容詞が名詞の前に置かれた複合語の場合のみ無変化である。形容詞が名詞の後ろに置かれた場合のみ、性数の一致を起こす。*Il a marché pieds nus et tête nue.* が一例である⁽⁶⁾。

6. ラテン語における形容詞の性

ラテン語では、形容詞の性を区別する標として、男性形は *-us*、女性形は *-a* が付くという規則があった。名詞にも同じルールがあったが、しばしば例外が見られた。形容詞には例外がなかったため、ここで性が見分けができたのである⁽⁷⁾。

<i>pater magnus</i>	大きい父 (父=男性名詞)
<i>domus magna</i>	大きな家 (家=女性名詞)

しかしながら、ラテン語には男女同形の形容詞もかなりの数あり、その標は *-is* であった。そのひとつが *grandis* (現在の *grand/grande*) であった。*grand-père/grand-mère* が男女同形になっているのはこのラテン語の名残とみられる。その後、中期フランス語のあたりから、他の女性形との類推によって男性形の語末に *-e* を付加する動きがあらわれ、これが一般化し定着していったとされる。

7. 形容詞の女性形の例外的変化

形容詞の女性形は、従って基本的に男性形に-eを足すことで統一されていった。-eを足すことによって、男性形では発音されなかった語末の子音が有音となり、耳で聞いた時にも弁別できるようになった。

grand [gRɑ̃] / grande [gRɑ̃d]

petit [pəti] / petite [pətit]

例外としては、

- ①男性形に-eを足しても音が変わらないものには子音が重ねられた。

pareil [paR ɛ j] / pareille [paR ɛ j]

naturel [natyR ɛ l] / naturelle [natyR ɛ l]

- ②男性形が-cで終わっているものが-queになるのは、古フランス語の格変化の影響が残ったもの。

public / publique

turc / turque

- ③-eur/-euseと変化するの、16世紀頃に名詞の語末の-rが発音されなくなったため、-eurが形容詞の-euxと区別できなくなり、女性形に後者の-euseを誤用したものとされている。誤用であったが発音上弁別ができるようになったためこの形が定着した⁽⁸⁾。

danseur / danseuse

vendeur / vendeuse

- ④-x/seの変化は、中世のラテン語回帰によるもの。

heureux/heureuse

malheureux/malheureuse

jaloux/jalouse

- ⑤doux / douceは、元々は男女同形であった (dulcem)。それを男性形と女性形を区別するために、俗ラテン語の女性形dulciaからdouceが生まれ、古いdolz, dousが男性形douxになった。

8. 前置形容詞複数家の前ではdesがdeに

ここで、もう1つの例外をみてみよう。grand/petitの形容詞を複数形で用いた時の傾向として、それに付く冠詞に例外的変化が起こることがある。通常、前置形容詞が複数形で置かれたとき、不定冠詞のdesはdeになると初級文法では習う。ところが、近年の用法では必ずしもそうならない例が認められている。

Je vois *de* grands maisons. 大きな家がいくつか見える。

Je vois *des* petites maisons. 小さな家が見える。

こちらの例は、で挙げられている例であるが⁽⁹⁾、数が断然多い用例（この場合は小さな家）は、合成語に近づいているのではと述べられている。同様の例として、

des petites filles	数人の少女
des petits bourgeois	数人のプチブル
des petits commerçants	小商店主
des petits porteurs	小株主

など挙げられている。形容詞*petit*と結びついた形で日常的に使われる1つの単語のようになっているものである。

また、漠然とした事柄を述べる時と具体的な現実を述べる時でも*de*と*des*で区別する傾向があると述べられている。

Il y a *de* jolies filles dans ce pays. この国にはきれいな娘が多い（漠然とした例）

J' ai vu *des* jolies filles là-bas. あそこで何人かのきれいな娘を見た（具体的な例）

近年では、名詞の前に置かれた前置形容詞複数形＋名詞複数の*des*が*de*になるという傾向は、場合によっては*des*が保持される例も多く見られるようになっているようである⁽¹⁰⁾。

9. 部分詞の*de*

そもそもこの前置形容詞複数形の前で冠詞の*des*が*de*になるという法則は、初学者を悩ませる規則の1つである。なぜという明確な説明がないまま、数の一致がなくなる例である。これは、遡ってみると、以前使われていた部分詞の*de*に由来するようである⁽¹¹⁾。後ろの続く名詞の一部を表し、現代フランス語にもその例は残っている。

Donnez-moi *de* ce vin. このブドウ酒を少し下さい。

Avez-vous *de* ses nouvelles ? 彼から便りがありますか？

この全体の一部分を示す部分詞の*de*は、現在の部分冠詞に名残が見られる。女性形*de la*で男性形の*du*も分解すれば*de le*になる。この*de*が全体の一部を指すという概念は部分冠詞をみるとよく理解できる。13世紀以前は*des*は特定のもののの中の一部という意味で（部分詞の*de*＋全体を表す定冠詞の*les*）、限定的用法であった。前置形容詞は、一般的な情報を名詞に加える後置形容詞に比べて主観を述べる、つまり限定的な情報を加えるものと考えられた。そのため、限定的用法が二重にならないように*des*ではなく*de*が使われるようになったのである。

また、いささか脱線するが、付加形容詞と冠詞の組み合わせについても少し触れておきたい。似たような文章であるが、その意味合いから使われる冠詞が変化する例である。状

況が変化しても（特に時制が何であっても）変わらない恒常的性質を示す場合、冠詞は定冠詞を用い、一時的な状態を示す場合は不定冠詞を用いる⁽¹²⁾。

Elle avait les yeux très claires. 彼女は、非常に明るい目をしている。
Elle a des yeux rouges. 彼女は泣き腫らした赤い目をしている。

10. 形容詞の位置

そもそも、古フランス語において形容詞はゲルマン語の影響を受け、英語やドイツ語のように名詞の前に置かれていた⁽¹³⁾。後に現在のような後置形容詞が定着していくが、この傾向は他の多くのロマンス語にもみられた。

もともと使われていた前置形容詞は「主観的な」判断や感情を付与する役割を担うようになる。これは、さらに遡ってラテン語にみられた傾向である。一般的に付加形容詞は名詞の後ろに置かれ、話し手の判断や感情が入った形容詞は前に置かれる傾向があった。ただし、格変化を持ったラテン語では語順は柔軟性があり自由であった。その名残とされるのが、複合語として残っている⁽¹⁴⁾。現代フランス語では、後置形容詞となるものである。

blanc-bec 生意気盛りの青二才
flagrant-délit 現行犯
rond-point ロータリー、円形広場
chauve-souris こうもり
à plat ventre 腹這いになって

11. 膠着言語と屈折言語

最後に、日本人学習者が感じる難しさの点において、語順についても述べておきたい。日本語は、世界の言語の中でも数少ない膠着言語 (*langue agglutinante*) に属する。膠着言語とは、簡単に言えば語順を替えても意味が変わらない（大きな違いをもたらさない）言語のことである。なぜならそれぞれの単語に文の中での役割（主語/目的語/補語）といったものを表す助詞が付随しているからである。その逆にあたる多くの言語が属する屈折言語 (*langue flexionnelle*) である。フランス語もちろんこちらに属する言語である。屈折言語は、語順によってその単語が主語なのか目的語なのかを表し、文の中でどの場所にくるかが非常に重要となる。

例えば
Paul aime Françoise.
Françoise aime Paul.

これらのフランス語の文は、SVO（主語＋動詞＋目的語）の構文であって、(1) の例は「ポールはフランソワーズを愛しています」という意味になる。語順を変えて (2) の文にすれば「フランソワーズはポールを愛しています」となり、意味がまったく逆になる。

単語は1つも異なるものを入れていないにも関わらず、語順を入れ替えただけで意味が変わる。これが屈折言語の大きな特徴の1つである。

一方、この現象が膠着言語においては起きない（多少のニュアンスの違いはあるが）。なぜならそれぞれの単語に助詞が付随されているためである。

- (1) ポールは^(A) フランソワーズを^(B) 愛しています^(C)。(ABCの語順)
- (2) フランソワーズを 愛しています ポールは。(BCAの語順)
- (3) 愛しています ポールは フランソワーズを。(CABの語順)

これは、ラテン語や古フランス語が格変化を持つのと似ている。語順が比較的自由に入れ替わり、それでも大意が変わらない構造である。日本人学習者が、文構造における語の位置変化による意味の違いに不慣れなのもこの母国語の影響が少なからずあるであろう。

12. まとめ

フランス語の初級文法において、先にも述べたが形容詞の項目はひじょうに早い段階で出てくる。殆どの大学の授業用につくられたテキストで、まず始めに①名詞の性と数（男性名詞/女性名詞/単数/複数の区別）、続いて②それに付く冠詞（不定冠詞/定冠詞/部分冠詞）、これらに続いて③形容詞が扱われる場合が多い。フランス語の形容詞には名詞の前に置かれる前置形容詞と後ろに置かれる後置形容詞があり、更にはどちらにも当てはまり意味を変える形容詞があるというあたりで、初学者は難しさを感じる。納得がいけない例外も多い。フランス語の祖語となるラテン語やその後変化を遂げて変わっていくロマンス語、古フランス語、中期フランス語、そして近代フランス語のなかで規則も変わり、一新されるもの、昔の規則へ戻るもの、一部分だけが例外として残るもの、実に様々で複雑である。すべてを初学者に説明しては混乱をきたすだけであるので、いずれもレベルに応じて例外については触れていくべきであろう。文法の基本を学んだ初学者が多くの場合ぶつかる「どうしてgrand-mèreはgrande-mèreにならないのか」「どうして不定冠詞のdesは前置形容詞の前ではdeになるのか」という素直な疑問に添えるよう、その言語的変遷について考察してみた。

注

- (1) 油はhvilleとなった。『フランス語のはなし、もうひとつの国際共通語』, p.23
- (2) *ibaid*, p.22
- (3) 『新フランス広文典』, p.95
- (4) *Dictionnaire historique de la langue française*, p.1537-38
- (5) 『新フランス広文典』, p.95
- (6) 『新フランス広文典』, p.102
- (7) 『フランス語統辞論』, p.219
- (8) *ibid*, p.205
- (9) 『冠詞抜きでは分からない』, p.33
- (10) *ibid*, p.34
- (11) 『仏話大事典』, p.678
- (12) 『フランス文法メモ』, p.176-77
- (13) 『詳解フランス文典』, p.100
- (14) 『フランス語統辞論』, p.241

Références

- CHERVEL, André : *Histoire de l'enseignement du français du XVII^e au XX^e siècle*, RETZ, Paris, 2008
- DENIS, Delphine, SANCIER-CHATEAU Anne, *Grammaire du français*, le Livre de Poche, Paris, 1994
- GREVISSE, Maurice, *Le français correct Guide pratique des difficultés*, de boeck supérieur, Paris, 2009
- MONNERIE-GOARIN Annie : *Le français au présent grammaire*, Les Editions Didier, Paris, 1987 (善本孝, 原田早苗, 西村亜子共訳, 『謎が解けるフランス語文法』, 第三書房, 2006年)
- NADEAU, Jean-Benoît, BARLOW, Julie, *The story of french*, (『フランス語のはなし, もうひとつの国際共通語』, 大修館書店, 2008年)
- NYROP, kristoffer : *Grammaire historique de la langue française*, Genève, 1979
- RIEGEL, Martin, PELLAT, Jean-Christophe RIOUL, René : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France(PUF) linguistique Nouvelle, Paris, 1994
- Rey, ALAIN : *Dictionnaire historique de la langue française*, le Robert, Paris, 2012
- Von WARTBURG Walther : *Evolution et structure de la langue française*, Teubner, 1934 (田島宏, 高塚洋太郎, 小方厚彦, 矢島猷三共訳, 『フランス語の進化と構造』, 白水社, 2009年)
- 朝倉季雄, 『新フランス文法メモー基本語の用法』, 白水社, 2000年
- 朝倉季雄, 『フランス文法事典』, 白水社, 2011年
- 石野好一, 『中級フランス語文法』, 駿河台出版社, 2017年
- 石野好一, 『フランス語を知る, ことばを考える』, 朝日出版社, 2007年
- 伊吹武彦, 渡辺明正, 後藤敏雄, 本城格, 大橋保夫, 『仏和大辞典』, 白水社, 1982年
- 市川周史, 『初学者も専門家も新・冠詞抜きでフランス語は分からない』, 駿河台出版社, 2003年
- 木内良行, 『フランス語の統語論研究』, 勁草書房, 2005年
- 佐藤房吉, 大木健, 佐藤正明著, 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社, 1991年
- 島岡茂, 『フランス語統語論』, 東京大学書林, 1999年
- 新倉俊一他, 『フランス語ハンドブック』, 白水社, 1999年
- 髭郁彦, 川島浩一郎, 渡邊敦也, 『フランス語学概論』, 駿河台出版社, 2011年
- 目黒三郎, 徳尾俊彦, 目黒士門共著, 『新フランス広文典』, 白水社, 1982年
- 若林茂則編著, 白畑知彦, 坂内昌徳著, 『第二言語習得研究入門』, 新曜社, 2006年

ウェブサイト

- 歴史で謎解き！フランス語文法, 第13回「なぜ, de bon restaurantsのdeはdesじゃないの?」, フランス語教育歴史文法派
- Marges de la linguistique 言語学の余白に「grand-mèreのgrand-」

quelques exceptions des adjectifs antéposés en français des mots composés (grand- et petit-)

Megumi NIHEI

Dans cet article, nous abordons quelques exceptions des adjectifs antéposés, notamment celles de concordance des genres et des nombres sur des mots composés comme grand- et petit- auxquels les apprenants débutants ont souvent la difficulté. Pour qu'ils puissent mieux comprendre, nous suivons des traces de ces mots.